

生存科学研究ニュース

VOL. 9, NO. 6,

1994, 11, 10発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

電話03-3563-3518

第15回「東西の健康観・医・薬」研究会 気は廻天するか？

9月8日(木)午後2時より、東北大学大学院文学部中国哲学・松木きか委員と、桜美林大学国際学部教授・湯浅康雄氏により報告がなされた。

松木氏は「医経における経穴の考え方」と題され、まず「黄帝内経」に始まる「医経」とされる東洋医学古典を中心としてその関連用語をレビューされた。「経穴」は元末明初の「十四経發揮」に初めて現れるが、それ以前のいわゆる「ツボ」と同一視されるようになる。それまでは、気穴、気府、骨空などがあり、手足の先から体の中心に向かって経があった。気が回転しその巡るルートが経脈であり、経脈を載せる身体は「流れない」ともいえる。中国医学のような異なる医学体系の認識方法として、一方の医学の見方を適応させるのは好ましくなく、共通の地盤を作ることが大事であるとして、体系化のモデルづくりの試みを示された。

湯浅氏は、「日本における気の流れ」と題され、中国と日本を対比させながら気の近年

の動きについて解説された。中国では、文革後、都市部を中心に復活し、政治からの誘導も見られる。学会が存在し組織化が進み医学領域でも用いられているが、自然科学者が主体で心理学がないのも特徴で、気が物質であるとの確信が強い。一方日本では、80年代から市民層から関心が高まり、特徴として心身相関や哲学など人文科学が主体であり、研究はまだ組織化されていない。その内容を心身論・身体論の立場から見ると、体と心を区別せずそれを媒介する位置にあり、気をベースにして心身関係を捉えることができる。この立場に立つと自然観すべてが気の問題となり「対象化」という見方がなくなる。客観化して検出するという立場は本来の見方からはずれ、気は本来感じるものであるとされた。

東北プロジェクト 「安家の将来を考える会」

10月14日(金)午後7時より岩手県岩泉町安家の公民館において「安家の将来を考える会」が開催された。地元住民のほか、岩泉町教育課長補佐の村松氏、久慈営林所長の吉野氏、済生会岩泉病院の柴野院長、県立久慈病

院の伊藤外科部長、研究所からは小平専務理事、中山常務理事、富沢事務局長、三井物産の三井氏等が出席した。

今回の会の準備のため、東京において、時には現地の住民も参加して、数回の会合が持たれ種々協議が重ねられたが、特に今回は、従来から考えてきた山間僻地における生活基盤と活力の増強を図る一手段として、地元住民間のコミュニケーションの強化、福祉・保健・医療関係者と住民とのコミュニケーションの強化等のために簡便なテレビ電話の利用を考え、機器の調達が準備され、安家訪問時にはそれを持参して公民館で披露し、地元住民の考えで存分に利用してもらうべく8台のテレビ電話が寄贈された。この研究の映像通信システムに関わる部分は三井物産からの委託研究となるが、内容的には共同研究として進めるために三井物産の関係者として三井氏が同行した。

さらに会議の直前、14日午後1時30分より小平専務 中山常務の両名が、岩泉町役場を訪問、企画調整課長山崎氏、保健課長川村氏、教育課長補佐村松氏等と会議を持ち、生存研の概要と生存研の研究の意義や安家での研究の経緯と将来構想を説明、また町役場側の将来計画の説明を受けて、今後の両者の協力を万全を期している。

公民館における会議では、住民が旧来のもろもろの束縛を自ら脱皮して、安家のまたとない自然の恵みを生かしながら、いかに生活を充実し健やかな生存を確保できるか自ら考え取り組むことの必要性が話され、林野行

政、医療・保健の立場からも隠し立てのない現実の状況が説明され、真剣な討議がなされたが、特に将来を担う若い人達の奮起が期待された。

「新しい市財政分析手法」研究委員会

生存科学研究所には、実践的地域研究の一つとして九州プロジェクトがあり、その中の一つ、別府市総合調査研究プロジェクトの一端として標記の研究委員会が本年度初期から設置され、筑井甚吉副理事長を中心としてすでに数回の会議がもたれている。

これは地球・社会・産業・財政に関わるインプット・アウトプット・アナリシス分析を軸として、地方自治体レベルでの財政分析手法を開発し、地域における生存基盤の充実を図ることを目的としている。10月28日（金）に開催された委員会では、別府市における各種データ作成の見通しを得て、具体的な作業が本格的に開始された。

平成6年度 第3回常務理事会

9月13日（火）午後3時より、研究所会議室において、中尾理事長代行を座長として平成6年度第3回常務理事会が開催された。会議では前回に引き続き、研究所の今後の方向を検討し、整理するため、(1)財団設定の目的、(2)運営の基本的手法やルールのあり方、(3)財政対策、財政に対応した事業のあり方の

3つに分けて、(1)に関しては、「生存の理法」の確立のためにすべてを集中する。そのために武見資料の確認のし直しをし、将来を見据えて方向を確認する。(2)に関しては、従来の学問の枠をはずして見る。生物学的関係論を哲学・科学へ持ち込むというような考えで、不確定事項を含めて「生存」を考える。(3)に関しては、学会的広さと深さをもって武見先生の言う「生存」に取り組み得るものに集中する。それらすべてを検討し集約するための基本構想委員会のような研究と他の高度な研究機関との協力関係の樹立。研究成果を普及させるための講演会、学術誌、武見記念賞、地域実践的研究等について討議され、「武見太郎がやろうとしていた生存科学とはこういうもの」ということを打ち出す努力を続けることを確認し、さらに具体的な課題が議論された。

さらに、10月11日(火)午前10時より開催された常務理事打ち合わせ会では、研究費の申請や財務についての報告の他、学術誌『生存科学』はじめ広報のあり方が、会員拡充の目的も含めて検討され、次の常務理事会での討議の準備が行われた。

平成6年度第2回 公益信託武見記念
生存科学研究基金 運営委員会

10月24日(月)午後2時30分より、武見記念賞・武見奨励賞の選考のための基金運営委員会が開催された。今年度からは、武見記念賞と武見奨励賞との候補者を同時に募集する

ことになっていたが、協議により、記念賞・奨励賞の何れかまたは両方で2名以内の受賞者を選考することになった。

今年度は武見記念賞候補者6名、奨励賞候補者1名の推薦があったが、事前に配布されていた推薦資料などにもとづいた協議の後、投票の結果、長野県厚生連佐久総合病院総長若月俊一氏、大阪大学名誉教授亜細亜大学経済学部長筑井甚吉氏の両名が武見記念賞受賞者と決定され、奨励賞は今回は欠と決まった。

若月氏は、農村における地域包括医療体制の先進的確立と農村医学の推進の功績により、筑井氏は投入産出分析を基礎とした経済的、社会的、環境的分析手法による生存科学への科学的、マクロ的アプローチの糸口を切り開いた功績により選ばれた。

受賞者への選考結果通知後、筑井氏は、研究がまだ途上にあることを理由に、将来の努力と成果を期して受賞を辞退したいと運営委員長に固い決意で表明され、運営委員長もこれを了承された。なお、授賞式は12月10日(土)午後、研究所会議室において行なわれる。

研究所日報

10月15日(土)第3回 バイオサナトロジー学会
総会 昭和大学上條会館(東京)
10月22日(土)第14回 日本川崎病研究会
和歌山市民会館(和歌山)

第5回生存科学シンポジウムのお知らせ

日 時 平成6年11月19日(土)
午後1時30分～午後5時
場 所 京都市東山区 泉涌寺(センユウジ)
山内 観音寺内 医聖堂大講堂

プログラム

講演(1)「武見太郎と生存科学研究所」

生存科学研究所専務理事 小平 敦

講演(2)「生命の科学と生きものの科学」

生命誌研究館館長 岡田 節人

講演(3)「生きること」

東京大学名誉教授 玉城康四郎

入場無料：会員の方は関心を寄せられているご友人を誘い、お出で下さい。

*講演者プロフィール

岡田節人：1927年兵庫県生まれ。京都大学理学部卒業。英エジンバラ大学、米カーネギー発生学研究所にて研究。京都大学理学部教授、岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所長、同機構長を経て現在「生命誌研究館」館長。京都大学他の名誉教授。国際生物科学連合副総裁。日本動物学会賞、アルコン賞、ハリソン賞、紫綬褒賞他受賞。著書「がん細胞」、「生命科学の現場から」、「細胞の社会」、「学問の周辺」(1991年佼成出版社)他多数。

玉城康四郎：1915年熊本市に生まれる。1940年東京大学文学部印度哲学科卒業。1964年東京大学

文学部教授。現在、東京大学名誉教授。著書「中国仏教思想の形成」(第1巻)、「日本仏教思想論」(上)、「東西思想の根底にあるもの」「比較思想論究」「仏教の根底にあるもの」「玉城康四郎 仏教の思想」(全5巻・別巻1)他多数。

別府市「子ども学フォーラム」予報

平成7年1月14日(土)、大分県別府市において別府市が開催する標記のフォーラムが、生存科学研究所の企画で行われる。これは生存研が九州プロジェクトの中の「人間性回復都市別府」総合的研究の一環として、特にその中の生存の未来を担う子供をターゲットとした実践的研究を小児生態学という視点から企画したもので、小林登生存研副理事長(国立小児病院院長)、伊東孝廣氏(別府市医師会会長・生存研会員)が中心となり準備した。

基調講演を今年度ノーベル文学賞を受賞した大江健三郎氏が午前中に行った後、午後には小林氏、伊東氏の両氏が座長を務めるフォーラムが開催される。